

忘れてはならない「水俣病」 ～環境教育の原点を振り返る～

神戸市立渦が森小学校
主幹教諭 神田孝治

1. はじめに

「たったの2ページでいいの。」と、5年生を担当するたびに、公害の学習が教科書で軽く扱われていることに疑問を感じていた。しかし、前回の改訂では、「四日市ぜんそく」が採り上げられて安堵した。

今から40数年前、私が小学校高学年のころは、毎日のニュースで「公害」が扱われない日はなかった。暑い盛りには、光化学スモッグのためにのどが痛くなって、プール水泳が中止になったこともたびたびあった。日本国中が「公害」で苦しめられる毎日だった。しかし、その反省を踏まえて積み重ねられた努力のおかげで、今はもう「公害」という言葉自体が、死語とまでは言えなくても、日常生活の中で見聞きする言葉ではなくなった。これは、喜ぶべきことであろうが、公害を過去の歴史の中に埋没させてしまってよいのだろうか。戦争の反省から恒久平和を追求し続けなくてはならないように、公害の反省もしっかり受け止め、環境学習を展開する責任が、私たち教員には課されているのではないかと思う。

2. 実践のねらい

地球温暖化とそれに伴う異常気象・人口増加による食料や真水の不足等、地球を取り巻く環境は悪化の一途をたどっている。将来の世代に住みよい環境を残すために、人間の行動に反省を促す環境教育は必須である。その日本での出発点が、公害病の原点と言われる水俣病であり、半世紀以上たった今も、新聞記事を見ることに驚きを禁じ得ない。水俣病については、それなりの教材と時間を用意して授業を行うべきだと考えた。具体的には、水俣病の原因と当時の社会的状況、水俣市民の考えや行動、悲惨な病状と今も続く後遺症、裁判での解決に向けた努力等を知らせ、世の中を驚愕させる大事件だったことを感じ取らせたい。そして、四大公害病をはじめとする様々な公害を乗り越えてきたおかげで、今の生活があることに気づかせ、より良い環境を作り出していこうとする意欲や態度を育てていきたい。

3. 現地での教材収集

私が教師になったばかりの頃は、まだ公害への意識が高く、水俣病についても詳しく授業をしていた記憶がある。だが、最近では適当な教材を身近に見なくなってしまった。しかし、DVD等の映像資料はきっとあるはずだし、パンフレットや読み物資料なども手に入りたい。そう思って、一度行ってみたいと思っていた水俣病資料館を訪ねることに決め、現地へ赴いた。

当日は、約2時間かけて資料館を見学し、授業に役立つような資料や絵本などを手に入れた。DVDも購入したかったのが見当たらなかったのも、受付で身分を明かして聞いてみると、「子供たちにしっかり教えてください。」とおっしゃって、無料で1本いただくことができた。分かりやすそうな映像資料で、感謝するとともに、水俣の人々の思いを感じ取ることとなった。



翌日は汚染された海を埋め立てた公園を見学したり、チッソ工場の入り口まで行って写真を撮ったりした。午後は、「肥薩オレンジ鉄道」の名物である「オレンジ食堂」に乗車し、現地の産業振興に役立つよう消費に心がけた。車窓から見る不知火海はとても美しく、かつて水銀に汚染された海だったとは、とうてい思えない絶景が続いていた。



4. 指導計画の作成

資料館の展示物や手に入れた資料から、今まで私がよく知らなかった水俣病の本当の悲惨さに気づかされた。水銀が水俣の人々の命や健康を奪い、長い間裁判が続いていたことは、私たちの世代では当たり前知っていることである。しかし、当時の人々の記録を読み進めていくうちに、次のことを知り、この授業の必要性を改めて痛感する結果になった。

- ・水俣病になっていない人が発病した人を、差別と偏見でいじめたり苦しめたりしたこと。
- ・市民同士でいがみ合うことになって、人々の絆が崩壊してしまったこと。
- ・水俣病が知られるようになって、周りの市町村の人々からも差別されたこと。

これらは、どれも人権問題としても取り上げられるべきことである。しかし、昭和30年代は、まだ同和対策事業も始まっておらず、国民の間に人権意識がまだまだ希薄だった時代である。病気で苦しんでいる人に追い討ちをかけるような残酷な仕打ちがあったことは、今の子どもたちには理解しにくいことであろう。だからこそ、肉体的・経済的な苦しみに加えて、人間関係による精神的な苦しみがとても大きかったという事実を伝えなければ、この学習の価値が半減すると思いい、指導計画の中に盛り込むように考えた。

(1) 単元名 国土の開発と自然

(2) 単元の目標

- ・理解に関する目標
国土の開発が私たちの生活や産業の発達と密接な関連があることを理解する。
- ・態度に関する目標
環境問題や過去の公害に関心を持ち、地域や国土の自然に対する愛情をもつ。
- ・能力に関する目標
自然破壊や環境保全に関する事象を観察し、写真や地図、統計資料等を活用して表現力を高める。

(3) 指導の流れ (全7時間)

- 第1時 公害の意味を知り、四日市ぜんそくについて関心をもつ。
- 第2時 四日市ぜんそくの被害状況と克服された経緯を調べる。
- 第3時 四大公害病をはじめとして、公害が全国的な大問題となっていたことを知る。
- 第4.5時 水俣病について詳しく理解し、様々な公

害の反省を生かして、良好な今の環境が保たれていることに気づく。

第6時 DVDで復習した後、現在の不知火海の写真を見て、環境は復元できても健康は取り戻せないことに気づき感想を書く。

第7時 前時の感想を聞きあった後、マイクロプラスチックなど現在も様々な環境問題が発生していることを知り、未来に向けての正しい行動が一人一人に要求されていることを理解する。

5. 水俣病の授業(第4・5時)について

(1) スライド資料の概要

水俣での写真や資料を基にして、限られた時間内で、子供たちに水俣病についてどのように伝えれば効果的だろうかと考え、パワーポイントのスライドにまとめて視覚に訴えながら、学年一斉に授業をすように計画した。以下がスライドの流れである。

- ・水俣市の場所、チッソの企業城下町としての発展
- ・1950年頃から生物・人間に起きた異常
猫や犬が踊り狂って死ぬ。大量の魚が浮き上がる海辺は貝の死骸だらけに。海草が育たなくなる。海鳥やカラスが空から墜落する。
口がきけず、歩くことができず、食事もできない幼児が入院。その後も次々と――。
- ・奇病とされ発病者をいじめたこと(三択クイズ①)
- ・廃液が原因と分かっていたのに認めないチッソ
- ・食物連鎖による発病とその症状
メチル水銀→プランクトン→小魚→大きい魚
※大きい魚ほど高い濃度で汚染されていく
- ・水俣病の症状
手足のしびれ 体のふるえ 脱力 耳鳴り
視野狭窄 難聴 言葉がはっきりしない
動作がぎこちなくなる
- ・胎児性水俣病 (詩集「戻らぬ命」から)
- ・水俣の周辺からの差別と風評被害(三択クイズ②)
- ・水銀中毒による公害病と認定、裁判の開始
- ・水俣市民の原告へのいやがらせ(三択クイズ③)
- ・汚染された海の埋め立てと再生、不知火海の現状
- ・水俣病から学ぶべきこと
- ・公害病の教訓
- ・「自然災害」と「人災」

※スライド合計 44枚

(2) 三択クイズを取り入れる

チッソの不誠実さ、国や県の不十分な対応、環境よりも経済・発展優先の世の中など、当時の未成熟な世情が被害を拡大させた。しかし、それ以上に差別と偏見がひどかったことを強く捉えさせたいと思い、NHKの学校放送番組視聴時に盛り上がる三択クイズを取り入れた。選択肢は答がより強く印象に残るように意外性のある言葉で設定し、その証拠となる資料を後で紹介して記憶に残りやすいように考えた。

① 水俣病にかからなかった人たちは、病気になった人たちにどうしたでしょう。

1. 世話をしたり励ましたりした。
2. まったく無視した。
3. 差別していじめた。

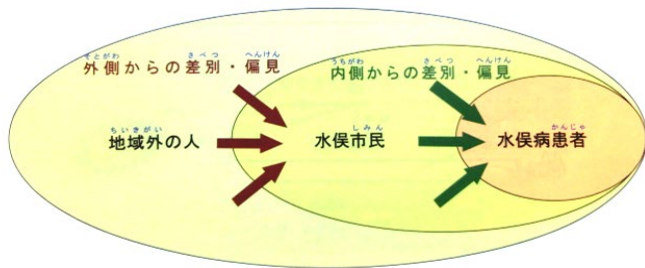
正解は3

村の人たちから「うつるから近寄るな。戸も開けるな。」と言われ、少しのすき間からでも石が飛んでくるし、お金を払っても品物を売ってくれず、玄関口には下肥をかけられ、網を切られるなどの嫌がらせが続き、こんなに人は変わるものかと思うくらい、いろいろないじめを受けました。
「杉本家の水俣病 50 年」より

② 水俣市外に住む人たちは水俣市民のことをどのように見ていたでしょう。

1. 気の毒に思い応援した。
2. まったく無視した。
3. 差別して避けるようにした。

正解は3



③ 裁判を起こした患者さんや遺族の人たちに、ほかの市民はどうしたでしょう。

1. 原因がはっきりしたので、みんな応援した。
2. まったく無視した。
3. 裁判をやめろと責め、いやがらせをした。

正解は3

当時の水俣は、チッソの城下町であったことから、チッソを敵に活動する私たちは水俣市民にとっても敵でした。裏では裁判を取り下げるようにといろいろな方法で嫌がらせをされましたが、ようやく裁判に勝ちました。しかし、チッソは水銀を垂れ流しすることは止めず、私たちは依然として悪者扱いでした。
※「資料館開館 20 周年記念誌」より

(3) 当時の人々の生の声を

水俣病にかかった人がどれだけ苦しんだのか、家族の人がどれだけ悲しい思いをしたのかということも、この学習の中で学んでほしいことである。「原爆資料館」や「人と防災未来センター」での震災学習のように、語り部の方から生で話を聞かせたいところであるが、それは無理な話。しかし、集めた資料の中に、水俣病詩集「戻らぬ命～百八つの水俣病患者の思いや手記から～」があり、その中から次の文を水俣病の症状と、胎児性水俣病のところで読んだ。

妹は急にご飯をこぼしたり、皿を落としたりして父にひどく叱られました。ところが、翌朝にはもっとひどくなって、足がもつれて歩けなくなり、しゃべれんようになって病院に入院しました。それでもずっと泣きっぱなしで、ものも言えなくなり、目も見えなくなって、手足も曲がり、身体もエビが曲がったようになってしまいました。そして、昼も夜もずっと泣いて、泣き続けて、本当に苦しんで苦しんで死んでいったんです。

お腹の子供のためにと、毎日魚を食べました。でも、生まれてきた娘は、7ヶ月になっても首がすわらず目も見えなかったとです。お医者さんは、子供の体をよく見もしないで、「だめですね。一生当たり前の姿にはならないでしょう。」と冷たくはねました。七五三の晴れ着を着せても、人形みたいに動かないで・・・。

(4) 水俣病から学ぶべきこと

パンフレット等を参考にし、次の五つに整理した。

- ① 人の命、健康、環境を何よりも大切に考える
→利益優先ではいけない
- ② 公害は起こる前に防がなければならない
→失われた人命や健康は元通りにできない
- ③ 被害を最小限にとどめる最大限の努力が必要
→すばやい対応が必要である
- ④ 正しい知識をもち差別やいじめ、偏見をなくす
→相手の立場になって考える
- ⑤ 一人一人が環境を守る努力をする
→知らないうちに環境破壊をしていないか
さらに、公害病全体から学んだ教訓として、次のことを伝えた。

- ・生きていくうえで、「きれいな空気・水」「安心できる食べ物」がいかに大切か再認識する。
- ・生活が便利で豊かな反面、害のあるものや危険なものもすぐ近くにあるかもしれないことを知る。
- ・身の回りの環境に関心を持ち、未来の環境を守ることが私達の大きな課題である。

- ・すべての人が安心、安全な生活をする権利をもっており、だれもそれを奪ってはならない。

そして、この授業の最後に自然災害と公害との違いを子供たちに問いかけた。すると、「公害は人間が起こした災害」「自然災害は防げないけど、公害は防げる」という答えを返してくれた。自然災害に対して「人災」と呼ぶことを教え、責任が100パーセント人間にあることを確認して授業を終えた。

子供たちの感想から

- ・水俣病が教えてくれることは、すごくたくさんあると私は思った。その頃は、「利益優先で安全や健康がおろそかになっていた。」「偏見やいじめが絶対にダメだという教育が行われていなかった。」ということを知ってとても驚いた。今の自分たちは「公害」という言葉を知らなくてもすむので、とても幸せなんだと思う。今、安心な社会に感謝したい。そして、もっともっと命を大切にしたい。
- ・水俣病を勉強して、人がもたらした害によって命を奪われてしまうなんておそろしいことだと思いました。病気になった人はすごく苦しいのに、伝染するなどかんちがいしていじめるなんて、今じゃありえないです。私は、これから人の気持ちを理解し、仲良く差別のない世界をつくりたいです。

6. 指導を終えて

子供たちにとって、人間が引き起こした悲惨な公害病への驚きはいへん大きく、現地へ行ってスライドを作成し、授業を組み立てて実践した値打ちは、確かなものであった。以下、授業後の私の感想である。

(1) 有効なパワーポイント

今回のように4クラス132人もの大人数を相手に授業を行うときには、スクリーンに視線を集中させ、スライドの文字や写真を順々に見せたり、強調したりできることは、集中力を持続させる効果が高い。写真や動画も簡単に取り込めるので、一斉指導には、今更ながたいへん効果があると感じた。

(2) 現地調査に勝る教材研究はなし

以前、東日本大震災の津波被害を現地で見た際、テレビの映像や新聞記事を見るよりも、その場に自分が立ち、自分の目と耳で見聞き、体で感じる事が非常に大切だと思った。今回も、資料館に足を運び、埋め立てられた水俣湾の上に立つことで、収集した資料の

内容をより正しく理解することができた。自らの足で獲得した当時の人々の思いが記された資料には、相応の思い入れが生じ、熱意をこめて授業ができた。

(3) 三択クイズの効果

三択の良いところは、すべての子が手を挙げて参加できることである。その答えが予想と違えば違うほど、その内容が頭に残る。みんなと違う答えにしようとする子も出てくるが、それはそれで当たった時に印象に残るものである。今回の三択クイズの①と③は、正解が3だったことに驚きの声が上がっていた。

(4) 映像資料を使うタイミング

資料館でいただいた子供向け15分間のDVD「水俣病のあらまし～水俣病と生きる～」は、たいへん分かりやすく作られたものである。しかし、私自身が最も衝撃を受けた「市民同士の偏見といじめ」についてはさりと語られており、印象に残るような編集ではなかった。これを見せれば、表面的な事実と流れは分かるだろうが、それだけで終わってしまうと思ったので、第6時に復習として見せることにした。映像は情報量が多く有効な場合が多いが、最大の効果が得られるように、場面を考えて使うことが大切である。

7. 終わりに

イタイイタイ病は、その名が示すとおりたいへんな痛みに襲われたのだろうが、神岡鉦山から出たカドミウムが神通川を汚し、稲が汚染されたとしか知らない。四日市ぜんそくの息の苦しきは、いったいどれほどだったのだろう。そんなことを考えると、今更ながら教材研究の大切さを切実に感じる。

この授業では、私が水俣へ行って気づき、驚き、子供たちに知ってほしいと思ったことは、伝えることができた。公害がいかに大きな影響を及ぼしたかを知り、環境を守ること、人の苦しみに寄り添うことの大切さを感じ取ってくれたのではないだろうか。

人権教育が学校で行われ続けている令和になった今、水俣病が初めて起きたなら、差別やいじめは起こらないのであろうか。人々の人権意識が高まり、誰の心にも潜む差別意識を乗り越えられる時代になっているのだろうか。子供たちの発言や感想で表わされた驚きや怒りの言葉が、これからの地球環境と人権意識をより良いものに変えていく原動力となることを願ってやまない。